様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　６　月　１４　日現在

機関番号：６２６０８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：２３８２００８１
研究課題名（和文）　国際舞台における日本人のイメージの形成―マダム花子の残像―
研究課題名（英文）　A Study of the Formation of Japanese People's Image on the International Stage ―Madame Hanako's Influence on It-

研究代表者
根岸　理子　（NEGISHI TAKAKO）
国文学研究資料館・学術企画連携部・機関研究員
研究者番号：80322436

研究成果の概要（和文）：本研究は、マダム花子（１８６８－１９４５）の活動を明らかにすることを目的として実施した。マダム花子は、２０世紀初頭、２０年近くにわたって欧米を巡演した日本女優であり、彫刻家オーギュスト・ロダン（１８４０－１９１７）の唯一の日本人モデルでもある。花子に関する資料は、海外に点在している。それらを現地調査し、花子一座の活動の実態を一部明らかにすることができた。特に、アメリカ議会図書館やニューヨーク公共図書館で、花子の写真や図版入りの記事や劇評を新たに収集できたことは、学界への大きな貢献であった。この成果は、２０１３年６月２２日に開催される日本演劇学会において発表する。

研究成果の概要（英文）：The Purpose of this study was to examine the performances of Madame Hanako (1868-1945). Madame Hanako was a Japanese actress who toured the West for nearly twenty years at the beginning of the 20th century. She is the only Japanese model Auguste Rodin (1840-1917) ever used. A great number of materials on her are owned by museums and libraries overseas. Through field work research, I was able to gain an understanding of the performances she was involved with. I feel that the discovery of articles and theatre reviews on her performances, which contain many photographs and illustrations, at the Library of Congress and the New York Public Library in the USA, has greatly contributed to the field of study. The results of this study will be reported at the Japanese Society for Theatre Research on 22nd June 2013.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：近代日本演劇
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：比較演劇・インターカルチャリズム・ジャポニズム・オリエンタリズム

１．研究開始当初の背景

２０世紀初頭、ヨーロッパ１８ヵ国とアメリカを巡演して人気を博した日本女優、マダム花子（１８６８－１９４５）に関しては、欧米においては研究論文が幾つか発表されているものの、日本では、彫刻家ロダンの唯一の日本人モデルとして注目されてきただけで、その活動には不明な点が多かった。

花子研究の嚆矢としては、花子の生涯を、

女優としての活躍も含めて概観した、ドナルド・キーンの「Hanako（花子）」(Donald Keene,‘Hanako’, *New Japan*, Vol. 14, 1962, pp. 125-127.) が挙げられるが、森鷗外の小説『花子』のモデルとなった実在の女性についての紹介といった趣が強い。

その後、アジアン・シアター・ジャーナルが花子について特集を組み、欧米の演劇研究者が様々な角度から花子とその舞台について検討した。その中で、レナード・プロンコは、貞奴と花子について、彼女たちは正統な歌舞伎を演じたとはいえないが、舞踊が中心となっている「日本の演劇」の本質を伝えたとはいえるのではないかという評価を下している（Leonard C. Pronko, ‘After Hanako’, *Asian Theatre Journal*, Vol. 5, No. 1, 1988, pp. 86-91.）。

また、同特集の自らの論考でキャシー・フォレイは、貞奴も花子も「自らが紹介しようとしている演劇にあまり精通していなかった」とし、彼らが歌舞伎のことをよく知らずにその「もどき」の舞台を見せていたとし、西洋の芸術家や観客は日本のコンテクストにおいての歌舞伎そのものよりも自分たちが思い描いた「他者」のメタファーを、貞奴や花子の舞台に求めたのかもしれない、と述べている（Kathy Foley, ‘Hanako and the European Imagination’, *Asian Theatre Journal*, Vol. 5, No. 1, 1988, pp. 76-85.）

こうした評価を下すには、当然のことながら、貞奴や花子の経歴や言行録、彼らの舞台を観た人々が述べている印象や感想などを吟味する必要がある筈だが、それは充分になされていないようであった。日本側の資料をほとんど用いることなく、論を組み立てている点が問題であると思われた。欧米の研究者によって書かれた花子の舞台に関する論文は、ごく限られた資料に拠ったものが多かった。

プロンコの意見とほぼ同じく、サン・キョン・リー（Sang-Kyong Lee）は、川上音二郎・貞奴、花子、筒井徳二郎などの一座は、上演作品においても演技においても伝統的な歌舞伎を見せたとはいえないが、それでもなおコポーやクレイグ、メイエルホリド、エイゼンシュタイン、デュラン、ブレヒトなどの西欧の芸術家や演出家は、彼らの舞台を通して日本演劇の特徴を知ることができたとしている（サン・キョン・リー著『東西演劇の出会い　能と歌舞伎の西洋演劇への影響』田中徳一 訳　新読書社　1993 年）。

この見解をさらに発展させた見方をしているのは、エリカ・フィッシャー＝リヒテである。フィッシャー＝リヒテは花子と貞奴は、当時隆盛であった自然主義の舞台に代わるものを求めていたヨーロッパやロシアの演劇改革者や観客に、「シアトリカル」な舞台の一例を見せたとしている（Erika Fischer-Lichte, *The Show and the Gaze of Theatre: A European Perspective*, University of Iowa Press, 1997）。

西欧における花子の評価は以上のような形におさまっているが、当然のことながら、これらの位置付けは、あくまでも「西洋側が、花子たちの舞台をいかに受け止め、いかに利用したか」という点に基づいてのものである。

そこで、本研究においては、花子の舞台が西欧でどのように受け止められ、それが日本にとってどのような意味を持つのか、という視点も加えることを目指した。

花子を送った側の日本の人々は、彫刻家ロダンとの関係においてのみ花子を論じようとしがちであるが、そのような中で國吉和子が、舞踊史において、貞奴や花子がその切腹シーンにより「小さなくせに苦悩を一身に背負う芯の強い日本人」という身体的なイメージを観客に植え付けたとしていることは興味深い ((國吉和子、『夢の衣装・記憶の壷　舞踊とモダニズム』、新書館、2002 年)。

しかし、貞奴や花子が与えた影響や印象は、けっしてそれだけに留まらないのではないだろうか。旅芸人の渡欧から始まり、万博、日本人村などで、日本人は時にはステレオタイプになるような様々なイメージを与えてきたが、そうした中で花子は、「日本の俳優」の典型的なイメージを西欧の芸術家と観客に強烈に残したのではないだろうか。西欧の観客がやがて「真正」の歌舞伎を見た時、そこに何ら新しいものを感じなかったともいわれているのは、彼女が残したイメージによるのではないだろうか。

海外に残っている花子一座の公演に関するパンフレットやちらし、広告や劇評などを収集し、分析することによって、花子が海外に残した日本人像が明らかになるであろう。これらの資料が、散逸してしまう前に集めて保存する必要があるのも確かである。

２．研究の目的

国際舞台における日本人のイメージの形成に多くを負っていると思われる国際女優・マダム花子の一座の実態を明らかにすることを目指して研究を実施した。

本研究は、１９世紀半ばに開国した後、日本人が海外に出て行き、どのようなイメージを作り上げてきたのか明らかにすることにもつながってゆくと考えられる。

開国後、最も早く海外に出て、日本の文化や芸能を紹介したのは、独楽廻しや足芸、手品などの旅芸人や芸者であった。海外の観客は、彼らの技の優れていることに感心しながらも、声援を送ってもニコリともしない日本人は冷淡だというイメージを持つこともあ

った。１９００年パリ万国博覧会で人気を博した川上音二郎・（マダム）貞奴の一座も、明らかにこの旅芸人の流れを汲んで登場したものである。

貞奴に続いて、欧米で話題になったマダム花子は、彫刻家ロダンの唯一の日本人モデルともなった女性であり、この二人の女優の迫真の演技によって、それまでの欧米の小説に描かれてきた可憐でか弱い日本女性像とは異なるイメージが加わったのであるが、川上夫妻に比して花子の活動には明らかにされていない部分が多い。

その不明な部分を調べ、彼女が国際舞台でどのように受け取られたのか、「日本人」のどのようなイメージを作り上げたのか、明らかにすることを目指した。

２０世紀初頭における日本演劇の西洋演劇への影響は、多くは西洋の演劇研究者によって検討され、日本の演劇研究者によって調べられることは、ほとんどなかった。特に、長期にわたる海外滞在から戻った後、日本の舞台には立たなかった花子は、日本においては、ロダンのモデルとしての彼女に注目した美術史研究者や、森鷗外の小説『花子』に注目した文学研究者によってごくまれに取り上げられるのみであった。

しかし、花子の見せた「日本人・日本俳優のイメージ」のインパクトは非常に強く、その後に海外公演を行った歌舞伎のみならず、現在の日本演劇の海外公演すらそれに多くを負っているように思われる。

花子一座の実態を明らかにすることは、開国後、海外において日本人のイメージがどのように形成されていったのか、また、日本人が国際舞台で活躍してゆくためには、どのような意識が必要で、どのような能力が求められるのかを、明らかにすることにもつながるのではないだろうか。

３．研究の方法

花子一座が公演をした国々でプログラムやパンフレット、チラシ、ブロマイド、新聞や雑誌に掲載された劇評などの資料を収集して、上演したものの内容やその評判を分析する方法を取った。

フィールドワークをおこなう場所に関しては、花子と縁が深く、資料が残っていることがほぼ確実である国を優先した。

こうした資料は、日本との文化交流史上、非常に貴重なものであるにも関わらず、それがいわゆる「点」として存在しているため、今までほとんど注目・活用されていなかった。点と点とを結ぶ作業をおこない、この初期の日本（演劇）と西洋の出会いがいかなるものであったのか、全体像を明らかにすることを目指した。

フィールドワークをおこなう前に、各機関と事前にメール等を通して連絡を取り、調査内容を伝えたうえで訪れ、ゆき違い等起らないよう心を配った。プログラムやポスターなどに関しては、演劇博物館や図書館を訪れて、学芸員や司書に相談しながら自身で直接探す方法をとった。

４．研究成果

これまで、日本の研究者のみならず、西欧の研究者もほとんど注目・言及していなかった、マダム花子一座の１９０７年と１９０９年のアメリカ公演に関する調査をすすめることができた。

花子自身の説明によると、アメリカ初興行は、パリの劇場で花子一座の舞台を観たアメリカの俳優アーノルド・デイリーから、自分の劇場でも公演して欲しいと依頼されたことから実現したものらしい。

花子は、2 度にわたるアメリカ興行について、「紐育（ニューヨーク）の一番有名なホテルの一等室から、毎日テァタァ、デイリイへ通いました」（１９０７年）「此の亜米利加行きは大失敗でした。其れはフウラアさん（ロイ・フラーのこと。川上音二郎・貞奴一座のヨーロッパ興行をお膳立てした興行師で、自らもダンサーとしてヨーロッパで成功をおさめたアメリカ人。）の代理人が芝居の小道具や衣裳を送るのを遅延さし、其の為紐育に有合せの日本衣裳や小道具でやったのですもの無理はありません」（１９０９年）と「芸者で洋行し女優で帰る迄の廿年」（『新日本』1917 年 1 月号）で語っているが、興行の詳細や観客の反応などについては触れていなかった。

アメリカの花子についての唯一詳しく言及しているドナルド・キーンは “HANAKO”（*New Japan*, Vol.14, 1962）において１９０７年のニューヨークでの公演は概して賞賛されたが、引き続いての地方公演においては、劇評は好意的なものばかりではなかったと述べている。また１９０９年の公演に関しては、花子の言葉を裏付けるように、「花子の再訪を待っていた人々は失望した。相応の舞台装置と衣装を欠いたため、ブルックリンでたった１回上演しただけで、公演は中止になってしまったのである」としている。

上記のようにこれまでの研究では「（地方公演においては、劇評は好意的なものばかりではなかったが）概して賞賛された」（１９０７年）、「失敗だった」（１９０９年）とされているのみであった、花子一座のアメリカ公演に関する資料（花子の写真や図版入りの新聞記事や劇評）をワシントン DC のアメリカ議会図書館やニューヨークのニューヨーク公共図書館およびパフォーミングアーツ

図書館で収集することができた。これらの資料のいくつかは、ボストンのハーバード・シアター・コレクションの学芸員の方々のアドバイスにより、入手できたものであった。

それらの資料により、花子一座のアメリカ公演は、「成功」「失敗」と一言で片付けられるものではないことが分かった。

自分たちアメリカ俳優の仕事が、花子一座の進出によって奪われると組合に訴える者も出てきたようで、こうした事例は、のちの日米関係を暗示しているように思われる。国と国との関係は、海外で活動する者自身の立場や評価にも、深刻な影響を及ぼすのである。

ヨーロッパ各国での花子の舞台の人気は、当時の日本の国際舞台においての立場によって後押しされていた部分もあったであろう。第一次世界大戦が激しくなる直前に女優を引退し、日本に帰国した花子は、まさに機を見るに敏な女性だったと思われる。

この研究成果は、２０１３年６月２２日に開催される日本演劇学会において発表する予定である。さらに、本年度内に英語論文として発表することを目指す。

国内外においてほとんど触れられることのなかった、マダム花子一座のアメリカでの公演についての発表なので、この分野の研究にかなりの貢献が期待できる。今後の展望としては、これまで収集した資料の詳細な分析を進めつつ、さらなる劇評やプログラム、ポスター、チラシ、写真等の収集に努めたい。

ロダンのお気に入りモデルであったこともあり、拠点としていた英国に次いで長く滞在することになったフランス、「花子」という煙草や彼女の顔写真が瓶に貼られたリキュールまで売り出されたというドイツ、日露戦争で敗れたにも関わらず、花子一座の公演を歓迎し花子を芸術家として遇したロシアにおいて、プログラムや劇評などを収集することができれば、国際舞台で活躍することの難しさや問題点などが浮かび上がり、花子一座の実態とその残したイメージをより明確にすることが可能になるだろう。

この時代に、花子ほど多くの国々を、これほど自由に行き来した日本人はいなかったであろう。どの国で興行をすればより収益をあげることができるか、花子一座の興行先の選択には「日本」という国の国際舞台における立場もまた、関係しており、花子の興行ルートを明らかにすることは、単に一巡業劇団の活動を記録することだけにとどまらないのではないかと思われる。

さらなる資料が集まり、花子一座の舞台に対する各国の反応を調べることができれば、そこから２０世紀初頭の世界における日本像というものも見えてくるのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
<u>根岸理子</u>、「アメリカのマダム花子」、日本演劇学会、２０１３年６月２２日、共立女子大学

６．研究組織
(1)研究代表者
根岸　理子（NEGISHI TAKAKO）
国文学研究資料館・学術企画連携部・
機関研究員
研究者番号：８０３２２４３６

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：